

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果の分析

豊後大野市教育委員会

1. 2024年度の総括（学力調査結果）

（1）小学校

①対象人数 小学6年生 218名

②結果

○全国学力・学習状況調査においては、国語・算数において目標値である全国平均正答率を上回った。

○授業改善が進み、問題解決的な学習展開も進みつつあると考えられる。

（2）中学校

①対象人数 中学3年生（9年生） 221名

②結果

○国語において、全国平均値を上回ることができた。

○全国と比較すると、数学科においては6.5ポイントと差が大きい。

（3）同一児童生徒

○中学校において、数学の教科において力を伸ばしきれていない状況がうかがえる。

○学年集団の持つ課題の明確化が必要である。

（4）新大分スタンダードに関して

○問題解決的な展開の授業が取り込まれるようになってきている。

○自分の考えを述べたり、話し合ったりする場の設定など、「思考力・判断力・表現力」を身につけるような意識や工夫がされるようになってきている。

（5）全体的総括

①小学校において、点数学力については一定の成果が見られ学力の維持がなされている。

②中学校では、数学の点数アップにつながる指導内容や理解力の向上について見直す必要がある。

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果 概要

豊後大野市教育委員会

平均正答率 (%) : 全国平均を上回った区分に着色

調査学年 教科及び 問題	小学校6年生					中学校3年生					
	国語		算数		理科	国語		数学		理科	英語
	A問題	B問題	A問題	B問題		A問題	B問題	A問題	B問題		
H27 ()内は全国	69.2 (70.0)	64.1 (65.4)	74.1 (75.2)	42.0 (45.0)	56.6 (60.8)	73.3 (75.8)	65.2 (65.8)	60.2 (64.4)	35.4 (41.6)	49.3 (53.0)	
H28	71.9 (72.9)	55.5 (57.8)	75.1 (77.6)	45.8 (47.2)		76.3 (75.6)	69.4 (66.5)	59.6 (62.2)	40.3 (44.1)		
H29	77 (74.8)	61 (57.5)	83 (78.6)	50 (45.9)		78 (77.4)	73 (72.2)	62 (64.6)	43 (48.1)		
H30	72 (70.7)	55 (54.7)	64 (63.5)	52 (51.5)	60 (60.3)	75 (76.1)	61 (61.2)	61 (66.1)	41 (46.9)	66 (66.1)	
R元(H31)	68 (63.8)		68 (66.6)			72 (72.8)		53 (59.8)			52 (56.0)
R2	コロナウイルス感染症拡大防止のため実施せず										
R3	69 (全国 64.7)		72 (全国 70.2)			66 (全国 64.6)		52 (全国 57.2)			
R4	65 (全国 65.6)		64 (全国 63.2)		64 (全国 63.3)	68 (全国 69.0)		49 (全国 51.4)		48 (全国 49.3)	
R5	68 (全国 67.2)		64 (全国 62.5)			69 (全国 69.8)		43 (全国 51.0)			40 (全国 45.6)
R6 豊後大野市	71		64			58.2		46			
大分県	69		63			58		50			
全国	67.7		63.4			58.1		52.5			

※ 令和元年度（平成31年度）から、A（知識）・B（活用）を一体的に問う。

同一児童生徒の正答率の比較 (市としての目標値の達成に向けて)
(今年度の中学3年)

教科及び 問題	国語	算数・数学
小学6年 (R3年)	69 (64.7)	72 (70.2)
中学3年 (R6年)	58.2 (58.1)	46 (52.5)

(一昨年度の中学3年)

教科及び 問題	国語	算数・数学
小学6年 (R2年)	感染症拡大防止のため実施せず	感染症拡大防止のため実施せず
中学3年 (R5年)	69 (69.8)	43 (51.0)

※ () 内はその年の全国平均

新大分スタンダードに関する質問の肯定率

	小学6年 質問紙	中学3年 質問紙
授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思う。	市 89.5 (全国 81.9)	市 82.8 (全国 80.3)
授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思う。	市 79.5 (全国 67.6)	市 75.6 (全国 64.8)
友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか。	市 93.6 (全国 86.3)	市 89.5 (全国 86.1)
学習の中でタブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか(ほぼ毎日、週3以上)	市 74.1 (全国 59.5)	市 85.5 (全国 64.4)

※肯定率とは、4択質問の肯定的な回答の上位2つの割合の合計

※全国の肯定率を上回ったものを着色

【各教科の概要】

《小学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

○国語

観点	市正答率	全国正答率
話すこと・聞くこと	59.5	59.8
書くこと	75.5	68.4
読むこと	73.4	70.7
言葉の特徴や使い方に関する事項	69.3	64.4
情報の扱い方に関する事項	87.6	86.9
我が国の言語文化に関する事項	78.0	74.6

●正答率が全国平均を下回っている問題 (2/14)

- ・目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる。
- ・登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができるかどうかをみる。

《小学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

○算数

観点	市正答率	全国正答率
数と計算	67.9	66.0
図形	68.2	66.3
測定		
変化と関係	49.1	51.7
データの活用	62.7	61.8

●正答率が全国平均を下回っている問題 (6/16)

- ・計算に関して成り立つ性質を活用して、計算の仕方を考察し、求め方と答えを式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる。
- ・速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察できるかどうかをみる。
- ・道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる。
- ・速さの意味について理解しているかどうかをみる。
- ・折れ線グラフから必要な数値を読み取り、条件に当てはまることを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる。
- ・示された情報を基に、表から必要な数値を読み取って式に表し、基準値を超えるかどうかを判断できるかどうかをみる。

《中学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

○国語

観点	市正答率	全国正答率
話すこと・聞くこと	60.2	58.8
書くこと	61.3	65.3
読むこと	47.4	47.9
言葉の特徴や使い方に関する事項	58.4	59.2
情報の扱い方に関する事項	60.4	59.6
我が国の言語文化に関する事項	80.5	75.6

●正答率が全国平均を下回っている問題 (8/15)

- ・資料を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように話すことができるかどうかをみる。
- ・意見と根拠など情報と情報との関係について理解しているかどうかをみる。
- ・文章の全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係を捉えることができるかどうかをみる。
- ・目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる。
- ・目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうかをみる。
- ・文の成分の順序や照応について理解しているかどうかをみる。
- ・表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができるかどうかをみる。
- ・表現の技法について理解しているかどうかをみる。

《中学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

○数学

観点	市正答率	全国正答率
数と式	41.9	51.1
図形	31.8	40.3
関数	58.6	60.7
データの活用	47.3	55.5

●正答率が全国平均を下回っている問題 (15/16)

- ・連続する二つの偶数を、文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる。
- ・等式を目的に応じて変形することができるかどうかをみる。
- ・回転移動について理解しているかどうかをみる。

- ・簡単な場合について、確率を求めることができるかどうかをみる。
 - ・問題場面における考察の対象を明確に捉え、正の数と負の数の加法の計算ができるかどうかをみる。
 - ・目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる。
 - ・統合的・発展的に考え、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる。
 - ・与えられたデータから最頻値を求めることができるかどうかをみる。
 - ・複数の集団のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる。
 - ・複数の集団のデータの分布から、四分位範囲を比較することができるかどうかをみる。
 - ・二つのグラフにおける y 軸との交点について、事象に即して解釈することができるかどうかをみる。
 - ・事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる。
 - ・グラフの傾きや交点の意味を事象に即して解釈することができるかどうかをみる。
 - ・筋道を立てて考え、証明することができるかどうかをみる。
 - ・事象を角の大きさに着目して観察し、問題解決の過程や結果を振り返り、新たな性質を見いだすことができるかどうかをみる。
- 一次関数について、式とグラフの特徴を関連付けて理解しているかどうかをみる。

2. 今後の取組について

(1) 確かな学力の育成について

2024年度の学力向上の方針は、以下の点を重点に取り組んでいる。

- ・ 学びに向かう集団づくり
- ・ 思考力・判断力・表現力
- ・ 生きて働く知識・技能

① 学びに向かう集団づくり

学級集団（学年集団）で学ぶ環境ができているか、今後点検する必要がある。4月以降を振り返り、2学期に向けて具体的な取組内容を提示する。

ア. 発表の仕方やグループ学習のあり方等、授業中の過ごし方について見直す。

イ. 学びに向かう姿を可視化し、児童生徒に取り組ませる。

② 思考力・判断力・表現力

生活力の基礎となる「思考力・判断力・表現力」が不足していることは、今回の調査についての「活用」の結果で明らかである。活用力の低さは、10年間の課題であり、なかなかクリアできない状況である。

ア. 日常生活の知識と体験活動の知識、そして学習内容の知識を活用し、課題解決を図っていく。そのような思考回路の多面化（多角化）が習慣化できるよう、意図的に学習の中に仕組む。

イ. 自分の考えを相手に伝える場面を多く経験させる。そのため、グループ学習でプレゼンを多く取り入れ、ディベート学習を用い、自己主張をさせる。また、発言の根拠を明確にする習慣を、すべての教科で身につけさせる。

ウ. 夢の実現に向け、主体的に自己実現を図るためには、最低限の点数学力が必要である。そのため、低学力層に対する個別指導の強化が必要であり、高学力層の児童生徒のさらなる増加が望まれる。

エ. 家庭学習を充実させるために、学習スケジュールを定め、習慣化できるよう目標設定を行う。また、定期的に自己評価を行い、自分自身の理解度を確認させる。

③生きて働く知識・技能

<小学校>

○低学力層（正答率30%以下）の割合
（ ）は全国の割合

国語 4.6%（7.7）
算数 7.3%（10.4）

○高学力層（正答率80%以上）の割合
（ ）は全国の割合

国語 32.6%（30.0）
算数 28.5%（33.7）

- ・全国と比較すると、国語・算数ともに低学力層の割合は低い。
- ・高学力層については、国語のみ全国以上である。
- ・高学力層のさらなる増加のために、発展問題を多く解く必要がある。

<中学校>

○低学力層の割合（正答率30%以下）

国語 13.2%（12.6）
数学 26.5%（20.3）

○高学力層の割合（正答率80%以上）

国語 14.9%（14.1）
数学 11.8%（20.4）

(国語)

- ・全国と比較すると、高学力層については全国以上である。
- ・知識定着のために、基礎的な問題を多く解く必要がある。

(数学)

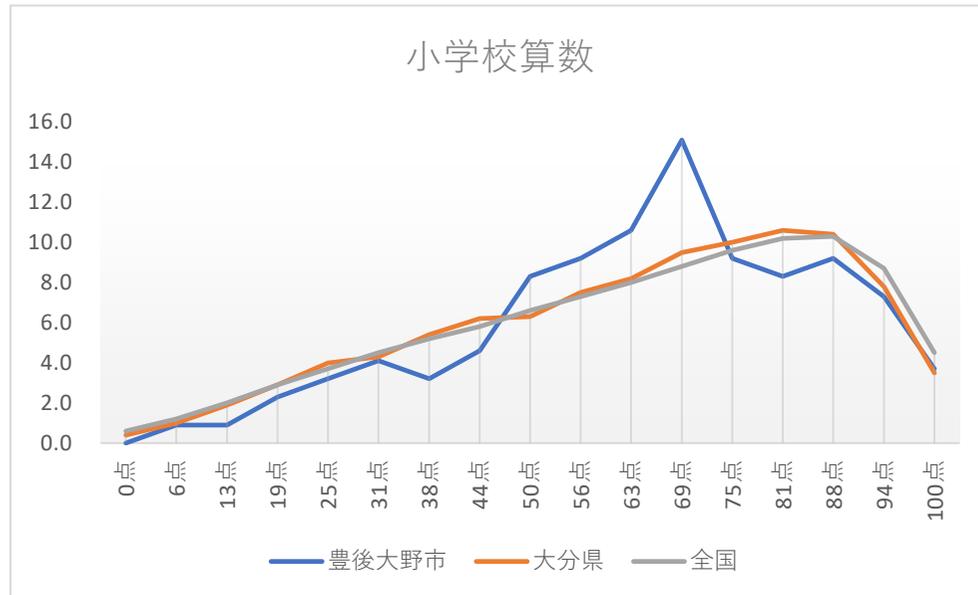
- ・低学力層の割合は、全国以上である。
- ・高学力層のさらなる増加のために、発展問題を多く解く必要がある。
- ・知識定着のために、基礎的な問題を多く解く必要がある。

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果

令和6年4月18日実施

平均正答率

	国語	算数
豊後大野市	71	64
大分県	69	63
全国	67.7	63.4

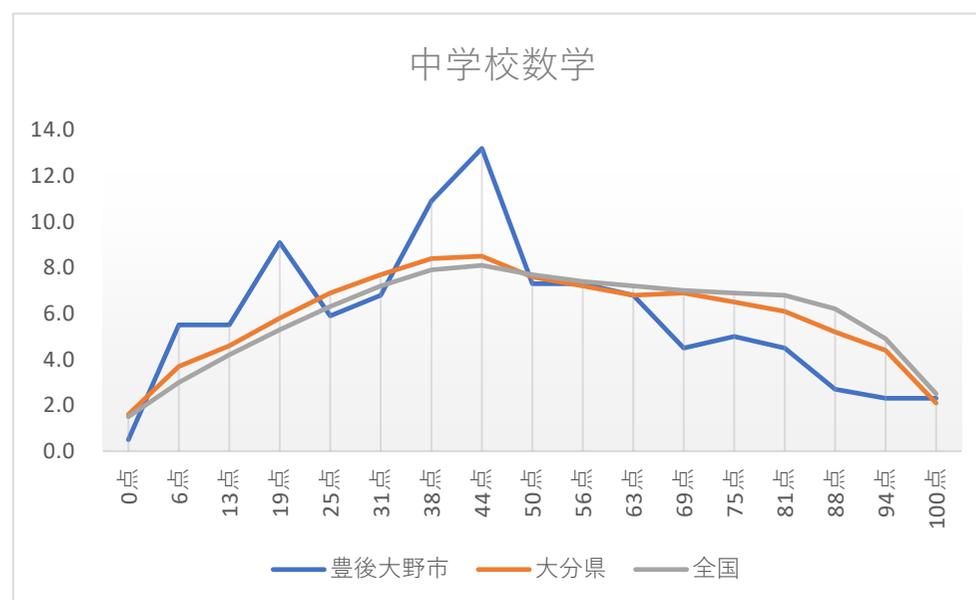
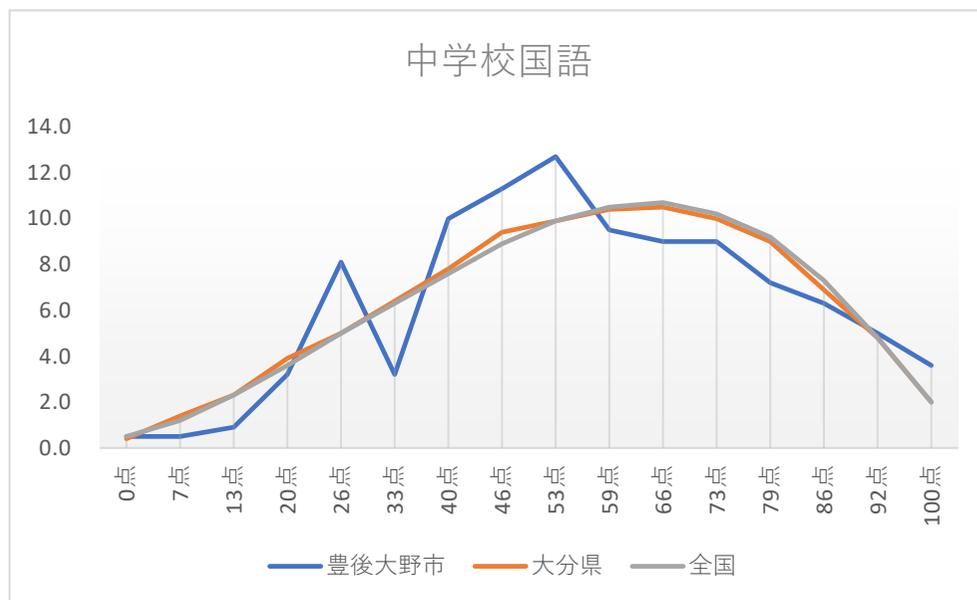


令和6年度 全国学力・学習状況調査結果

令和6年4月18日実施

平均正答率

	国語	数学
豊後大野市	58.2	46
大分県	58	50
全国	58.1	52.5



【 豊後大野市 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問調査）

1 調査結果の概要

児童質問調査

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」との問いに対して、本市では89.5%と、県平均（83.2%）全国平均（81.9%）よりも肯定的に回答した児童が多い。
- ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」との問いに対して、本市では、93.6%と、県平均（87.1%）、全国平均（86.3%）よりも肯定的に回答した児童が多い。
- ・「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」との問いに対して、「ほぼ毎日」「週3回以上」と回答した児童は、本市では、74.1%と、県平均（56.8%）、全国平均（59.5%）よりも肯定的に回答した児童が多い。

生徒質問調査

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」との問いに対して、本市では82.8%と、県平均（80.3%）全国平均（80.3%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。
- ・「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」との問いに対して、本市では、89.5%と、県平均（87.1%）、全国平均（86.1%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。
- ・「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」との問いに対して、「ほぼ毎日」「週3回以上」と回答した生徒は、本市では、85.5%と、県平均（66.9%）、全国平均（64.4%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。

2 豊後大野市の児童・生徒質問調査の調査結果をふまえて

本市では、主体的・対話的で深い学びについて、「学びに向かう集団づくり」が重要であると考え、以下の点を中心に継続して取り組むことにする。

- ①発表の仕方やグループ学習のあり方等、授業中の過ごし方について見直す。
- ②学びに向かう姿を可視化し、児童生徒に取り組ませる。
- ③日常生活の知識と体験活動の知識、そして学習内容の知識を活用し、課題解決を図っていく。そのような思考回路の多面化（多角化）が習慣化できるよう、意図的に学習の中に仕組む。
- ④自分の考えを相手に伝える場面を多く経験させる。そのため、グループ学習でプレゼンを多く取り入れ、ディベート学習を用い、自己主張をさせる。また、発言の根拠を明確にする習慣を、すべての教科で身につけさせる。

【 豊後大野市 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（学校質問調査）

1 調査結果の概要

小学校：学校質問

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

・「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では45.5%{県平均(30.5%) 全国平均(20.1%)}であった。

・「授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では27.3%{県平均(17.5%) 全国平均(12.4%)}であった。

・「自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか」との問いに対して、「ほぼ毎日」「週3回以上」と回答した学校は、本市では100%{県平均(65.4%) 全国平均(55.1%)}と高い。

中学校：学校質問

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

・「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では0%{県平均(29.9%) 全国平均(20.6%)}であった。

・「授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では0%{県平均(19.7%) 全国平均(16.2%)}であった。

・「自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか」との問いに対して、「ほぼ毎日」「週3回以上」と回答した学校は、本市では71.4%{県平均(65.8%) 全国平均(51.9%)}と高い。

2 豊後大野市の学校質問調査の結果をふまえて

・「自分で考え、自分から取り組むことができている」と回答した中学校が0%という結果から、生徒の自主性を育てるために、問題解決型学習の導入や生徒が自分で課題を設定し、それを解決するためのプロジェクトを設定する必要がある。

・「自らの考えがうまく伝わるよう、発言や発表を行うことができている」と回答した中学校についても0%という結果から、発言・発表スキルの向上を目指すために、ディベートやプレゼンテーションの機会を増やしたり、意見をまとめて発表したりするためのワークショップを開催する。

・「ほぼ毎日」「週3回以上」ICT機器を使用しているという結果は、生徒がICT機器を活用して学習していることがうかがえる。しかし、その活用方法が自主性や発言・発表スキルの向上につながっているかどうかは明らかではない。したがって、ICT機器の活用方法を見直し、それが生徒の自主性や発言・発表スキルの向上につながるような活用方法を模索していく必要がある。